

萱

2021·10

十月集

亀田虎童子

腹の虫健在なりし桃を剥く
真夏日やいささか狂ふ電子辞書
草鞋一足岩魚釣りせる名残りかな
おだやかな白紫陽花の鉢ひとつ

九十五歳

生涯に梅干いくつつ喰うたやら

ネオンの色写す川面や西鶴忌
切り口の角いさぎよし水羊羹
遠雷や苦き記憶を呼び覚ます
そびえ立たつタワーマンション大西口
西瓜切る家族に友に仏前に

千葉 中山 恵子

空蝉やありあふものもうつくしき
歩みでてたちまち蝉の時雨かな
みだれたる髪を小詰めに原爆忌
蚊遣火の闇を隔ててなずみだる
手にしたるその空蝉の軽さかな

東京 根來 隆元

うなぎの日に鰻を食べる老夫婦
縁側に円座一枚敷かれあり
生身魂そろそろ雑に生きやうか
蟬しぐれなかに怒れる声のあり
ただ青き川の流るる広島忌

茨城 平佐 悦子

白百合や母は仏に満中陰
夏灯ナーズ運べる重湯かな
夏服の若きナーズの余香かな
夏の夜やナーズコールの鳴りやまず
初蝉や葉また増え退院す

東京 ふなかわのりひと

衣更甘味喰べたくなつてきし
苳つぶす自分が自分嫌になり
青すだれ風をやさしくしてしまふ
箸遣ひ下手になりたる豆の飯
祭笛昔むかしへいざなへる

東京 松下 道臣

塀となす夾竹桃の浄水場
根戸城址今も私有地梅雨茸
夏木立蜂の巢箱の屋根連ね
草茂る中に鉄棒らしきもの
梅雨晴間とことこ電車対岸を

千葉 光成 敏子

図書館の三階テラスつくつくし
草叢にあわて逃げ込む青蜥蜴
ドツグランやひどく吠えらる今朝の秋
朝涼や夢と現をゆきもどり
境内は蝉の故郷子ら走る

東京 谷田貝順子

道端の草を食みつつ陸の龜
にこやかに少年龜と歩調かな
選り分けて大中小のメダカかな
久々に出合ふ知人や木槿咲く
解体の捗る隣家走馬灯

東京 柳田 秀子

朝採りのひまわりの花頂きし 東京

渡辺しづ子

夫の煎るコーヒー旨し朝かな
名も知らぬ大樹の緑陰にぎり飯
押し入れの中迄入りし西日の矢
眠られぬ夜のペランダ月白し

パソコンのゲームに執す残暑かな 東京

飯塚トシ子

草むらへ隠すやにおく落ちた蝉
葉隠れにひよこりひらく秋揚羽
十代の八月コロナ下の米寿
さつまいもコップの中で芽に青葉

合流してより神田川木槿咲く 東京

加倉井たけ子

踊り子の中に幼き吾をさがす
八十の吾に八月の山遠く
高原の風に吹かれて吾亦紅
西瓜提げ五輪マークのバスに乗る

蝸や石段 長き羽 黒山 東京

釜田 敬司

一条の水脈万緑の小島へと
今朝の秋多摩の山並みくつきりと
荒川の清流眼下鮎づくし

八月や舗道に乾く鳩の糞 東京 小島 良子

原爆忌同じ名の人いくたりも

新聞の川の手版や草の花

旧盆や男の箸の鉄刀木

敗戦日ビルの四面に窓あまた

青白い腹見せ蝉の生終はる 菅原 朋子

五輪後のコロナの嵐盆に要る

二十年目益提灯を組立てる

麻殻折る力年々弱くなり

提灯の青い灯火の魂祭り

朝顔や人の背を見て背を正す 東京 関 喜久子

マンホールのふたの花柄梅雨晴間

もういと鳩の啼声梅雨長し

老木の根本ふむなと梅雨の森

おみくじは凶末吉と梅雨末期

浅眠り覚めてなほ夜や熱帯夜 東京 武田 未有

夜の秋風モナリザの微笑ほど

土笛の御堂にわたる処暑の夕

子の寮に宿るも久し窓銀河

遠慮なく音たて桃をすする仲

月日貝戻らぬ日々を殻に秘め

高橋 将夫

昔より汀ありけり月日貝

省二

句集「命と心」

紙に天地紙のかたへに月日貝

〃

二〇〇一年、葉山御用邸「しおさい公園」吟行の折り、園内の博物館の展示物の中に月日貝があった。はじめて見るきれいな貝であった。

昭和天皇は生物のご研究をなされていて、葉山にもよくお出掛けで、近くの海で採集されたもののようにであった。

月日貝は子供の掌ほどの大きさの二枚貝で、両耳があり片方の殻は赤くもう片方は淡黄色で、これを日と月に見立てて名づけられている。

掲句の「戻らぬ月日」には、どうしても六十四年の激動の昭和の時代を思う。貝に籠められた月日はそのまま私達の心に刻まれた歲月である。

「槐」の岡田省二先師も、この貝を詠まれた。

槐誌は、二〇二二年七月に創刊三十周年を迎えられた。「俳句は精神の風景、存在の詩」という先師の精神が、今に確と受け継がれている。

実石榴の一粒として輝けり

将夫

石榴の実は熟すと裂け、ぎっしり詰まった実をのぞかせる。一粒一粒が精一杯命を張っているようである。人それぞれの生き方を思い遣るような優しさにも通じると思う。

メタセコイア並木狭間の風薫る 上田日差し

「らんぶる」七月号

在五忌の掬ぶに足らぬ山の水 日差し

葛飾区の都立水元公園は、大場川の水を入れた小合溜がひろがる。対岸は三郷公園で、見事なメタセコイアが立ち並んでいる。生きた化石ともいわれるこの木は三十メートル以上にもなり、和名はあけぼの杉。樹冠の尖った円錐形の姿は杉属独特の勢いを見せて美しい。冬にかけて小枝ごと葉を落し、水元側から見ても針葉樹の鋭さが趣き深い。

掲句は、樹間を抜ける薫風から、メタセコイア並木の迫力や、辺りの景の広がりも感じられ、明快である。

在五とは、阿保親王の第五子であるところから、在五中将と呼ばれた歌人在原業平のこと。情感溢れる流麗な和歌を残している。光源氏のモデルといわれる源融と、ほぼ同時代を生きている。奔放な生き方も在五中将なればこそ。

掲句の「掬ぶに足らぬ」からは、こまやかな思いや、雲上人の日々に潜む空しさのようなものも感じとれるが、しかし、山の水は僅かづつでも絶えることなく豊かに、私達の心を満たしてくれるもの。

在五忌の頃の野山の新鮮な息づきに、はるかなる平安の世へふと心が遊ぶ。